

お茶壺道中と都留

復活から10年

お茶壺道中行列が、平成12年10月におよそ310年ぶりに復活してから、今年で10年目。これまでお茶壺道中実行委員会（前身はお茶壺道中研究会）を中心に多くの方々が、この復活に向けた取り組みと、さらに発展させるための努力をしてきました。それが実を結び、お茶壺道中行列は、八朔祭と並び、城下町つるを象徴する歴史的ロマン溢れる代表的なイベントとなりました。

今月は、お茶壺道中と関わってこられた方々の思いにスポットをあてながら、改めて都留の歴史のすばらしさを伝えたいと思います。

お茶壺道中とは

誰もが知っているわらべ唄「ずいずいずつころばし」。この歌の一節に「茶壺に追われてとつびんしゃん」とあります。これは、江戸時代に行われたお茶壺道中行列に追われる子どもたちを唄ったとされています。そして、ここで登場するお茶壺道中は、都留市と深い関わりがあります。

江戸時代、幕府が將軍御用の宇治茶を茶壺に入れて江戸まで運ぶ行事を茶壺道中、あるいは宇治茶壺道中と言いました。初めて幕府が宇治茶の上納を命じる宇治採茶使を派遣したのは慶長18年（1613）とされ、茶壺道中が制

都留とのかかわり

江戸時代の前半期、城下町であった都留の姿を伝える谷村城下絵図には、他の絵図には見られない「御茶蔵」という文字が記されています。このことは、お茶壺道中によって運ばれた將軍家御用の茶壺が、この地に収納されていたこと、同時にお茶壺道中がこの地を経由していたという歴史的事実を物語っています。その理由としては、都留（谷村）の気候条件は、夏涼しく、新茶を保存するのに適していたことや、当時の谷村を治めていた秋元氏は徳川家の側近として活躍し、徳川家から絶大な信頼を得ていたことなどが挙げられています。しかし、基本的な史料が乏しく、不明な点が多いことから、事実関係をはっきりできていません。そこで市では、平成17年から勝山城跡学術調査を、5カ年計画で実施しています。今年は、調査結果が出る最終年です。

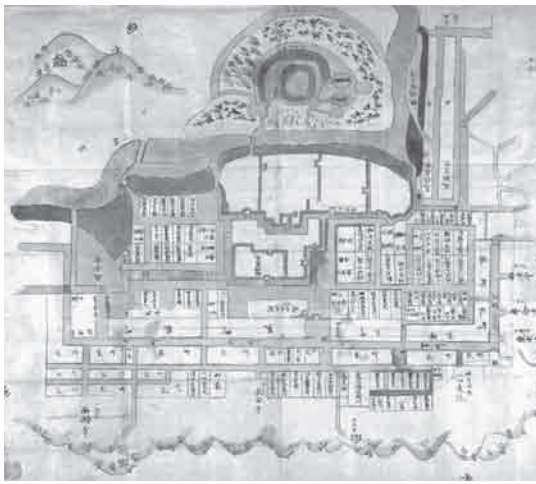
茶壺蔵推定地の調査

勝山城跡の発掘調査の中で、お茶壺蔵推定地の調査は平成19・20年度にかけて実施しました。ここでは、お茶壺蔵推定地の調査に至るまでの経緯と成果について説明をしたいと思います。

お茶壺蔵は勝山城のどこに置かれていたのか実は良く分かっておらず『谷村城下絵図』でその場所を確認できるのみです。この絵図をでは、本丸から北東方向に突き出た平坦部に「御茶蔵」と描かれ、これが場所を直接示した手が



りとなります。また、『下谷村村明細帳』には「御本城より御茶壺蔵迄道程五十四間：」という記述があり、本城を本丸とすると本丸から五十四間（約100m）の距離にお茶壺蔵が存在していたことが考えられます。こうした絵図や文献の情報、過去の現地調査からお茶壺蔵の推定地が絞られ、実際に調査に着手したのが平成19年度のことでした。調査地点は北尾根の付け根部にあたる平場です。日当たりが悪く、桂川から



谷村城下町絵図（横山家蔵）（右）

同絵図の勝山城部分（上）
「御茶蔵」と記されています。

度化されるのは寛永10年（1633）とされています。当時、毎年4月下旬から5月上旬になると、宇治から茶葉の生育状況の報告を受け、茶壺付添い人ら（8〜14人）が茶壺とともに江戸を出発します。「茶詰め」は採茶使が宇治に到着してから9日目から茶道頭の立会いのもとで始まり、茶詰めを終えると茶壺は封印され、羽二重で包み、さらに、その上を綿入れの帛紗で包み、長棒駕籠の中の箱に納めるというものです。その取り扱い、細心の注意が払われていました。

お茶壺道中は五摂家や宮門跡に準じる権威の高いもので、茶壺が通行する際には、大名らも駕籠を降りなければならず、街道沿いの村々には、街道の掃除が命じられ、街道沿いの田畑の耕作が禁じられたほどです。

※帛紗とは、主に茶道で茶器を取り扱うときに用いられる布で、服紗・袱紗とも表記されます。材質は絹がほとんどですが、煎茶道では木綿のものが使われることもあります。

※長棒駕籠とは、かつぎ棒が長く、数人であつぐ上等の駕籠のことをいい、格式のある人、または特別に許された人が乗りました。

※五摂家とは、鎌倉時代に成立した藤原氏嫡流で公家の家格の頂点に立った五家のことです。近衛家、九条家、二条家、一条家、鷹司家の五家があります。

※門跡とは、日本の仏教の開祖の正式な後継者のことをいい、門主ともいいます。鎌倉時代以降は位階の高い寺院そのもの、つまり寺格を指すようになり、それらの寺院を門跡寺院と呼ぶようになりました。宮門跡とは門跡のついで、法親王・入道親王が住職として居住した寺院のことをいいます。



「御茶蔵」付近を発掘した結果、柱を建てていた跡（柱穴）が発見されました。

吹き上げる風によって冷涼であり、茶葉を貯蔵するには適した環境にありました。また、本丸から徒歩で約100mの地点に位置し、文献の記述にも一致しました。調査はトレンチと呼ばれる試掘坑を設けて部分的に調査を実施しました。地表下深さ30cm程で、花崗岩（石材として御影石とも呼ばれています）の地山面が現れ、この面を調査していくと直径30cm程の柱穴や柱を据えた礎石が2基確認されました。このことから、この地点には柱穴を用いた建物と礎石を用いた建物が時期を前後して存在していた可能性が考えられます。

柱穴は南北にかけて3基確認され、それぞれ半間（90cm）の間隔を持っており、この柱間から蔵に用いた柱穴である可能性が高くなりました。さらに南の斜面部の調査では、尾根を分断するように溝が通っていることが明らかにになり、溝の底の層は細かい砂質土で水分を含んでおり、排水用の溝として設けた可能性が考えられました。

平成20年度にはさらに範囲を広げ調

はじまりと盛衰

お茶壺道中の始まりは慶長18年（1613）とされています。時は、徳川家康が秀忠に將軍職を譲り、大御所として存在していたときのことです。その後、「茶壺道中」と呼ばれる権威ある位置づけがなされ、制度化されたのは、寛永10年（1633）とされています。

「ずいずいずつころばし」の一節に「茶壺に追われて・・・」と示すように、茶壺道中は、遊んでいる子どもたちも、遊ぶのを止めてしまうような（怖い？）存在であり、茶壺道中と行きあうときは、たとえ大名であっても道を譲らなければならぬほど権威を与えられていました。この行き過ぎた権威が災いして、道中では村人などトラブルを起こすなどの問題もあり、お茶壺道中にも改革が加えられていきました。特に八代將軍吉宗の享保の改革では、経費節減を目的に茶壺の数を制限したり、行列の人数を減らしたりしてお茶壺道中の簡略化を図りました。その後、文化9年（1812）、家斎のときにも、道中規模の縮小が行われました。そして、幕末にかけて徳川家の権威が失墜すると同時に茶壺道中もおよそ230年にわたる歴史に幕を閉じたのです。



將軍家献上茶壺（復元）
宇治市歴史資料館蔵

查を実施し、平成19年度に確認された柱穴3基から北へさらに3基の柱穴が続いていることを確認しました。また、この計6基の柱穴から西に1間（1m80cm）離れて同数の柱穴が南北に並行して確認され、この地点には東西に幅1間、南北に長さ2間半（4m50cm）の建物が建っていた可能性が考えられます。

調査地点は茶葉を貯蔵するのに適した環境であり、また排水の溝を設けて建物を流水から防ぐ点、確認された建物が蔵であることを総合して考えると確認された建物がお茶壺蔵である可能性が高くなりました。ただし、お茶壺道中を行っていた江戸時代には礎石を用いた建物が主流であり、柱穴は用いないのが一般的です。今回確認された柱穴を用いた建物は恐らく浅野氏が在城していた安土・桃山時代に築かれた可能性が考えられ、その後江戸時代に入り、建物の機能はそのままだに、柱穴から礎石を用いたお茶壺蔵に建て替えたことが考えられます。

今回の調査によって勝山城内のお茶壺蔵の全容が明らかとなりました。現在は、発掘の調査成果をまとめている段階ですので成果がまとまり次第、改めて皆様にご報告したいと考えています。



2基発見された、礎石。
江戸時代（お茶壺道中が行われていた時期）が建物に一般的に用いられていました。